五條小学校通信

かけはし

2013年１０月２３日

第１４号

当 た り 前

９月から大学生２名が教育実習に来ました。教育実習は、教員免許状を取得するための大切な単位になります。いわば、教員の見習いのようなもので、たいていは母校で行います。ふたりも五小の卒業生でした。以来、４週間、２年生と６年生の学級に分かれて、子どもたちと生活を共にしてきました。その間、指導教員の田中先生と鷹堅先生から学級経営や学習指導など、実践のイロハを学びました。そして、その実習の集大成として、先日、１時間の授業を行い、参観した先輩教員たちからさまざまなアドバイスをもらって大学へもどっていきました。

その授業の中のことです。２年生の教室を覗いてみました。実習生は緊張でガチガチでしたが、初々しい笑顔で子どもたちを優しく包みながら、九九につなげる前段階の学習に取り組んでいました。

そこで、びっくりしたのがひとりの女の子の振舞です。その子は、先生から指名を受け、黒板に出てきて解答しました。正解です。その安堵感と喜びを満面にたたえて、席にもどる途中のことでした。欠席児童の机の横を通り過ぎた辺りで、突然、彼女がかがみました。その視線の先には、床に落ちている給食袋がありました。彼女は、それを拾って、そっと机のフックにかけ、何事もなかったかのように席へ帰って行きます。

まだ２年生が、さりげなく、見事にやってのけました。さわやかな風が私の心の中を吹き渡りました。その感動をいち早く担任に伝えたくて、授業が終わってから早速、その旨をお話したところ、その旨をお話ししたところ、先生からこんな言葉が返ってきました。

「あの子はやるやろ…。でも、落ちている物を拾う。そんなの当たり前やん。踏んづけたり、蹴飛ばしたり、知らん顔をしたりするのはもってのほか。それをまたいだだけでもうちは厳しく叱られるんやで。だから、たいていの子は拾うでぇ。」

……。低学年は、……ここまでやるか。……恐れ入りました。

でも、ちょっと待てよ。もしうちの学級なら……？？？

「しつけ」の糸はいつか切れます。では、切れた後はどうしたらいいのでしょう。学年が上がると、当たり前が当たり前でなくなることもあります。